

庭訓
女

冰
咲
妹
脊
山

三種神寶此書
 入鹿塚乃図
 大判車挾高事
 魔術亂行の圖

~ 13
 3100
 1



題陳陝妹脊山

和語古言曰。女曰。妹男曰。脊也。孤陰
 則不生。獨陽則不長。故天地配以陰
 陽。男以女為室。女以男為家。故人生
 偶。以夫婦陰陽和而後。兩澤降。夫婦
 和而後。家道成矣。舊事紀陰陽本紀
 曰。伊羿諾尊先。唱曰。妍哉可愛少女
 歟。伊羿再尊後。和曰。妍哉可愛少年
 歟。云云。妹脊蓋緣斯歟。夫陶嬰黃鵠
 有歌。淑蘭孤燕。有吟。此婦之義者。秦

卷之二

13
3100
1-5

13
3100
1

五卷分 七日限

昭和九年
七月三日
晴末

晉兩國以成婚妹春相契駕鵲橋以
渡河牛女相會至若禮重親迎所以
正人倫之始詩首好述所以崇王化
之原故要知身修而後家齊夫義自
然婦順是以覽者宓識為妹春之誠
意云爾

音

文化戊辰蘭秋之月上澣

振鷺亭主人



妹春山關目各名錄

振鷺亭

淨春山大判事實赤松長臣石見太郎左衛門雅助獵師巖七實

中村五郎祐直樵夫芝六實間嶋三郎四郎雅元箸中村箸右衛門

且妹山挾高實太宰小貳妾雉子內侍實巖七妻小生古雅輔

實女兒小厠子太郎實橘姬三作杉松具松磯松乙松小且雛鳥

實男兒黑木賣阿三輪實赤松政則哥弟丑芳野王實獲我

入鹿亡靈宮越玄蕃荒卷左源太醉々婆

名士逃名偶扯同心友

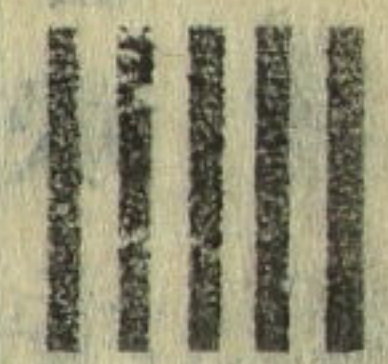
才女憐才誤落奸人手

兩番嫁塔都是假姻緣 湖上笠翁題

一旦逢親纔完真配偶



套一第



芳野皇居之套

附入鹿塚之由来



套二第

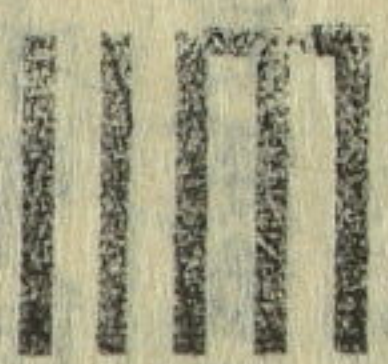


入鹿惡灵之套

附芳野王残暴之事



套三第

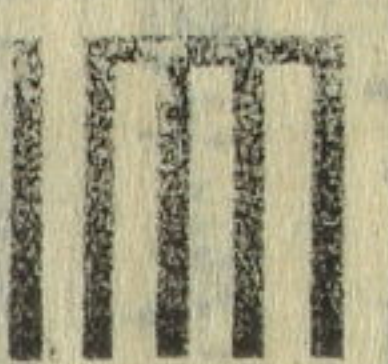


三輪味酒店之套

附子太郎孝行之事



套四第

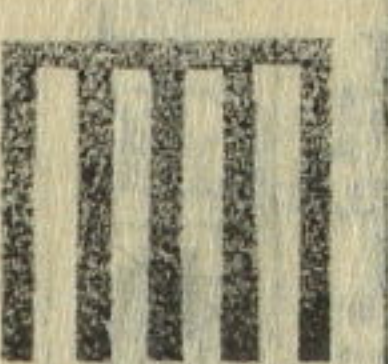


阿三舞之套

附竹住雀之紀原



套五第



龍門曲水之套

附牽牛織女之事



套六第



妹山之套

附狭高離鳥貞烈之事



套七第



脊山之套

附大判事古雅輔忠臣之事



套八第



破御所之套

附鱧七勇力之事



套九第



十三嶺之套

附三作兄弟復讐之事



套十第



愛別離苦之套

附雉子貞操之事



套十一第



鹿報恩之套

附芝六忠勇之事



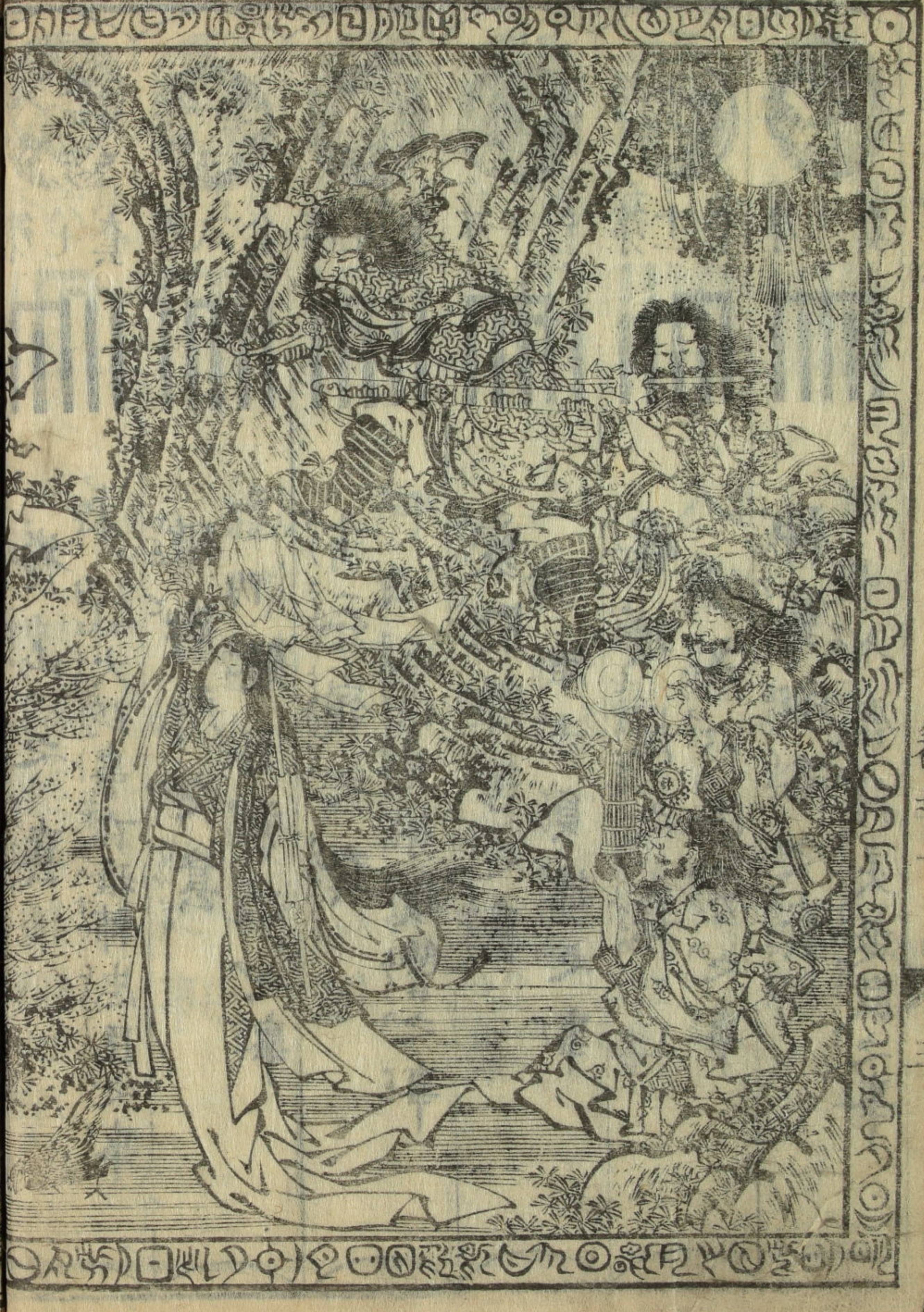
套十二第



神寶飯洛之套

附入鹿惡灵退散之事

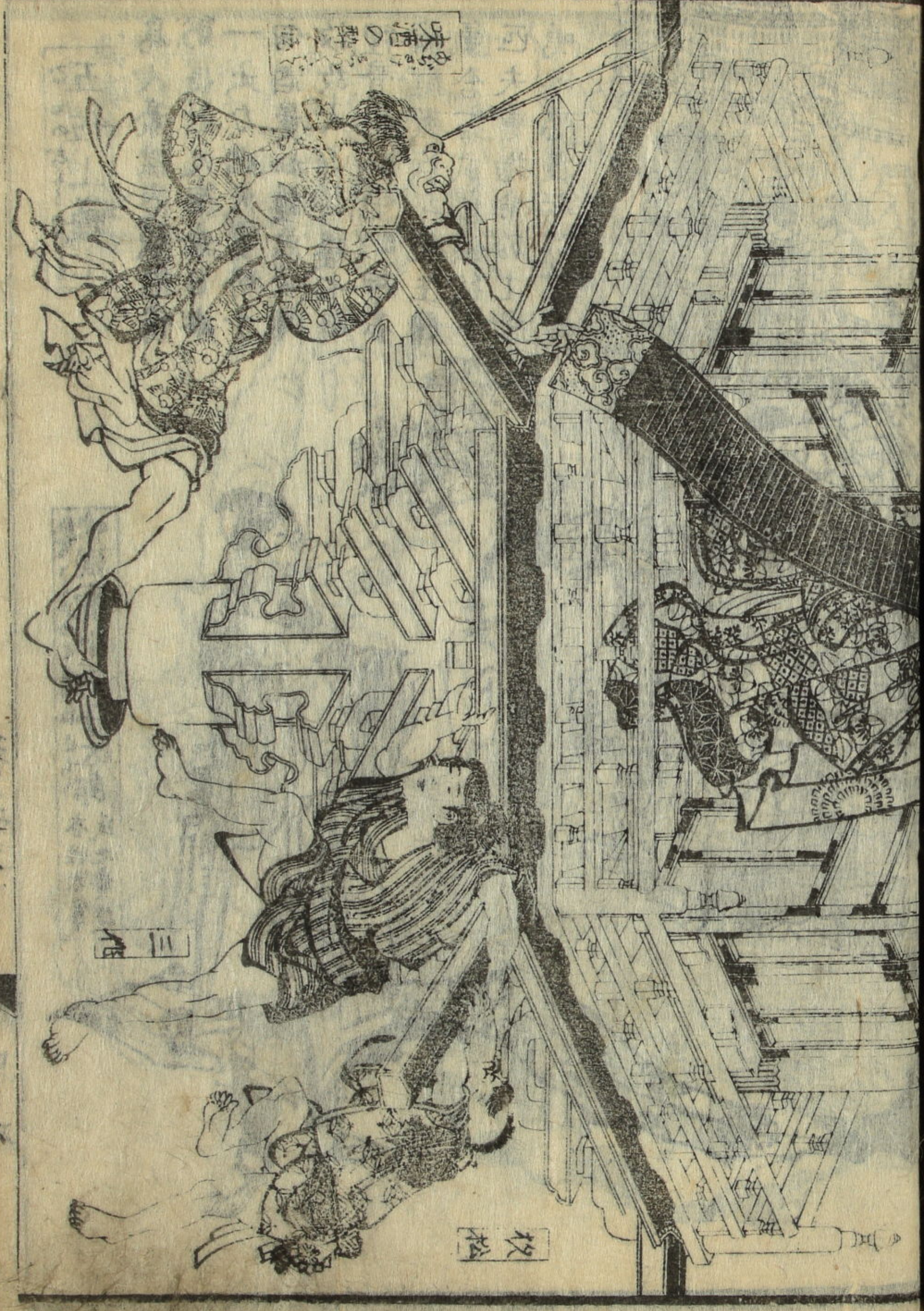
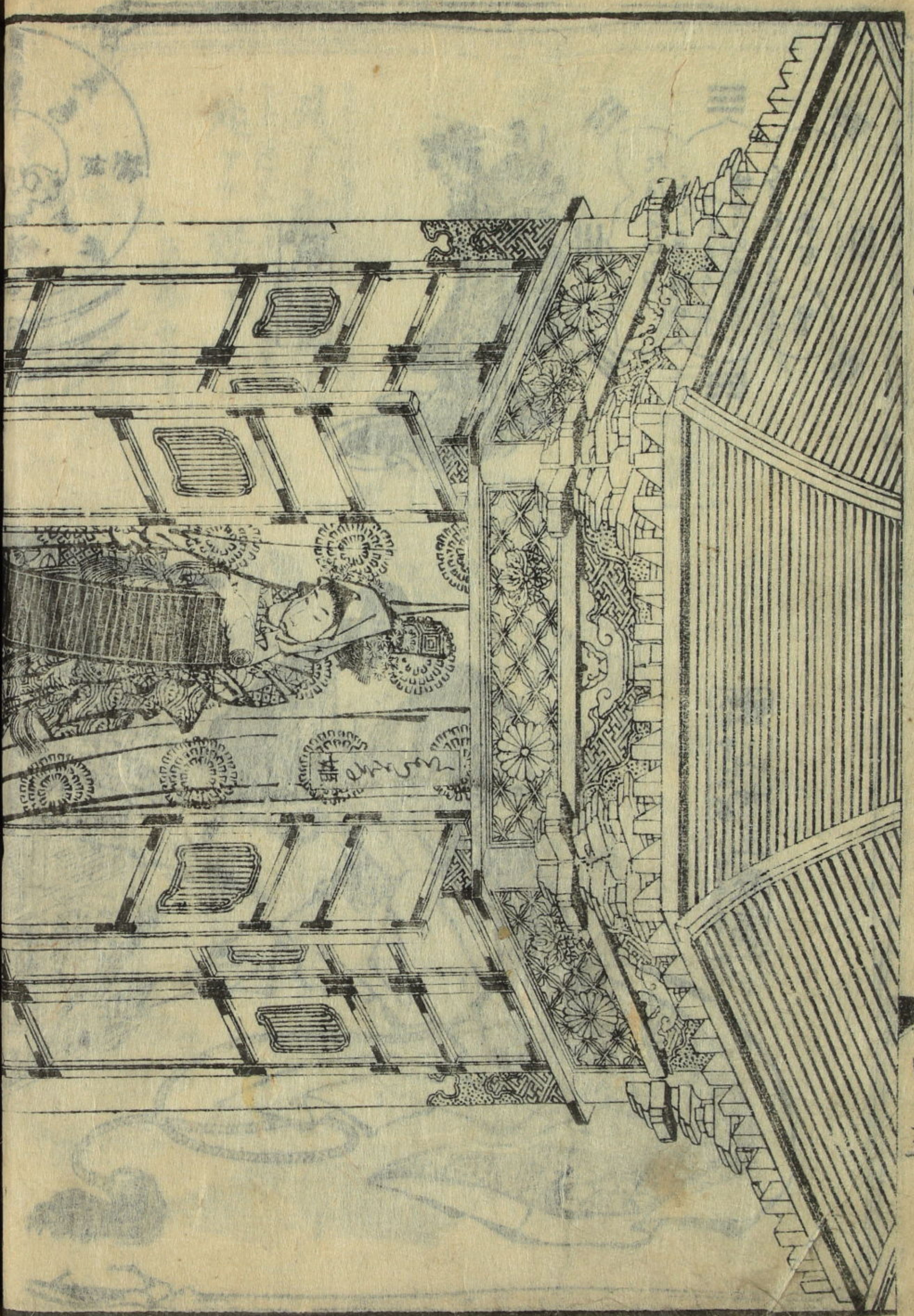
鏡 蓋 鯛 圖 御 所 侍 内



卷 之 一

第 一 回

五



味酒の酔之極

枚松

三

五位上 饒七

為人豪傑容貌魁偉
躬長七尺有余日奉
一大力也天資好十
旬酒量如饒魚吸潮
汐故人呼名饒七醉
裡骨相如金剛神亦
解醒數五斗先生膽
氣合百武陽候徒不
匹夫勇抱命於主恩
嗚呼忠臣壯哉勇哉

味酒 麩小 麩子太郎 本性太宰氏之貴族



つごもる所と英勇
強はるるの令別林を
二天門の令別林を
つごもる所と馬を
八尺余の渡櫓櫓を
ひつぎて酒を斗余
の樽十余を容す
負勇力や試を
形勢うの芳母王
戲感ありて五位
の上をなまよる



いもや山

巻之二

四六



つゆのしら

あまの

折光の街
 鏡の玉梅の春
 まつりて桐軒の
 風風の装束の
 湯の泉明の舞
 とつや 春の都のくまの
 窪田の屋の万葉の松林
 とこそとをさうすいもも代を
 えつれがわらわのや我も又勇
 のりる春ののまふ
 んそとて吉
 のの袖の
 山よ
 ねも
 藤が
 天津
 我を
 誰の
 切ら
 腹り
 春め
 糸酒

阿三輪



山海經曰有獸焉其狀
 如白鹿而四角名曰
 夫諸曾識者判曰此
 獸也狀似鹿前後
 有頭兩頭能食毒
 草可名茶有杵者
 乎云云

人も
 人ふ
 今も
 今も
 今も

芳野樵夫柴六
 婦鴉人妻雉子



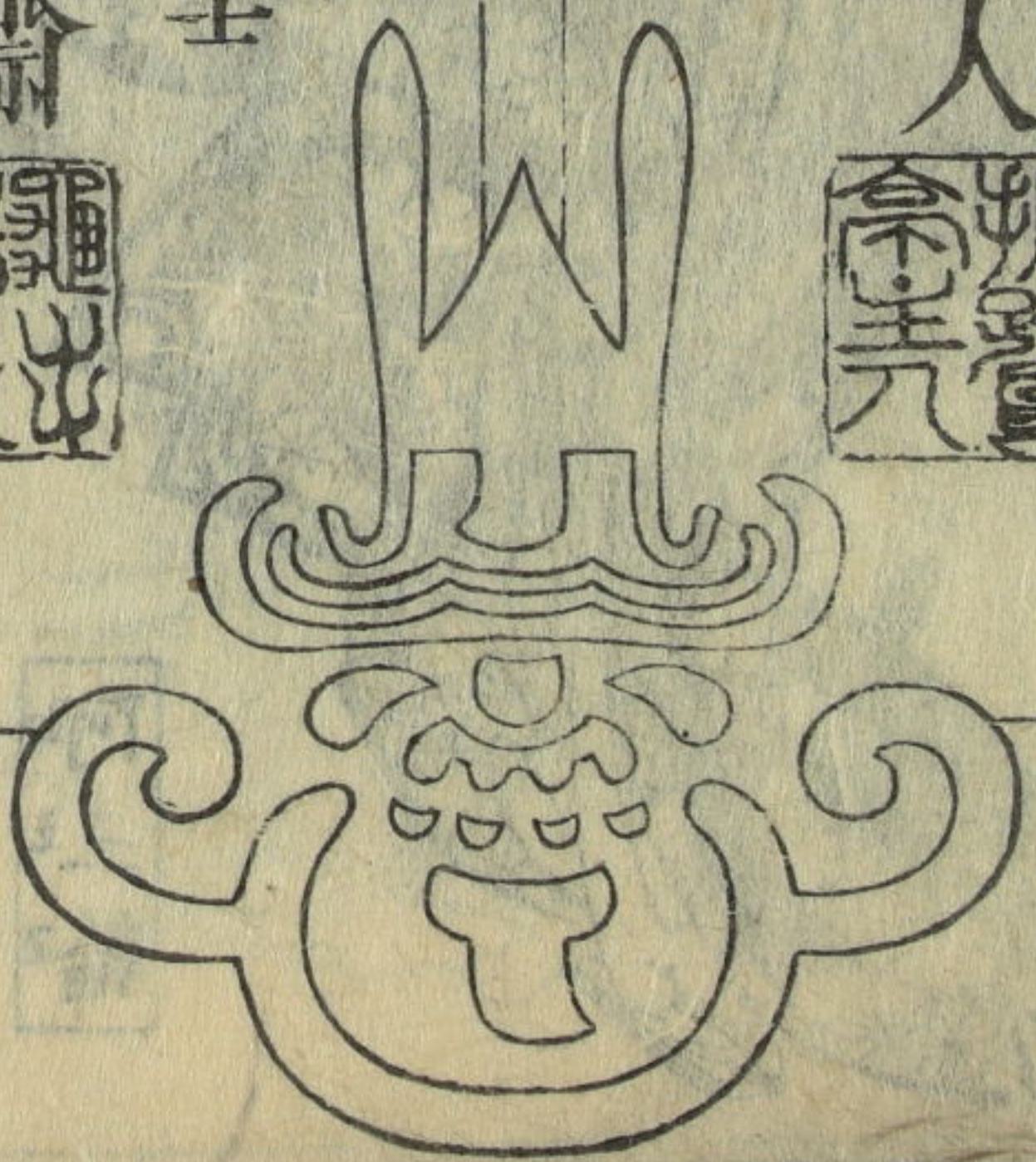
江都淺草金護山下隱士

著述士 振鷺亭主人



江都本莊兩國橋邊隱士

縱畫生 葛飾北齋



秋妹脊山卷之一

江戸 振鷺亭主人 著

○第一

吉野皇居發端の套
附リ入鹿塚の由来

情扶桑神國の靈驗新考を以て考ふる中全くと三種の神器の瑞證
なり其故を柳此二種の神器と申す奉るは王者おのづから天位と
爲るに天子と爲る所の基神道王はの元器として神代の始より
人皇の今に至り未流継躰し玉宮成るとなると第一は神
靈とて天の全躰也此比一素盞鳴尊より天照大神へ
八坂瓊の曲玉より凡玉を一躰なり玉とて理ありや像
万理とてこれ神靈の一玉也極れ所なり呼々二種圓滿の理言語

ふ伸筆も書もおそれあり故ふ神代より壘の箱ふ納ていし
とくごも國土一圓よ治るるもこれ神靈の徳なり第二ふ寶劍とす
素盞鳴尊出雲國敷の川上ふ天降しを以て脚麻の乳手麻の乳
夫婦稲田姫を愛して啼哭声を憐給い八雲立其下の八又乃
大蛇を斬りて其尾より取らるる劍これを天の蓋雲の劍とも
又ハ十束の劍とも号く日本武尊東征の肘太神宮ありたる神勅
在り此劍を給り東よおけしを給ひしところハ賊徒武藏州ありを
放てそのを焼滅さんと欲すす耐るる劍は抜れり草木と薙捨るの
黒地ふ退て火難を遁え終ふ凶徒を誅滅し給ふこれより後人皇ふ
つゝて草難の劍と号り亦内侍所とすハ天照太神天の岩戸よ
因幡より入るハ月落日没と天下暗黒の世とあり其時一千の神連

あつりて鏡は鑄させ神の枝も屬く神歌をうさひ給ふ天照太神
岩戸を出入せ給しハ赫々圓滿の御形鏡も移て永く御影と住る
是日本開闢の基なれば内侍所とすなりとて此と後の神靈も付
て一時の物語ありけり于茲人皇九十九代の御宇も當て後醍醐
天皇三種の神を奉り抱芳母の山中ハ皇居を卜られてこれを南河の
帝とす奉り京都の帝とすハ河内とす奉る此肘本朝も二人の天子
御在故いづれおれば尚初後嵯峨院の御厨第一の宮後深草院
二れ宮龜山院更ハ世に知食べしと遺勅ありしより皇統一一流ハ
これ其源を中せ給俱ハ同根連枝の派なり然るも其越の
悲起り建武の一乱出でて天子南北よりたれて盛衰と事給ひ
朝儀改え互ハ張行と國戦止耐はしとてその南帝とす龜山院の

のむせ山

巻之二

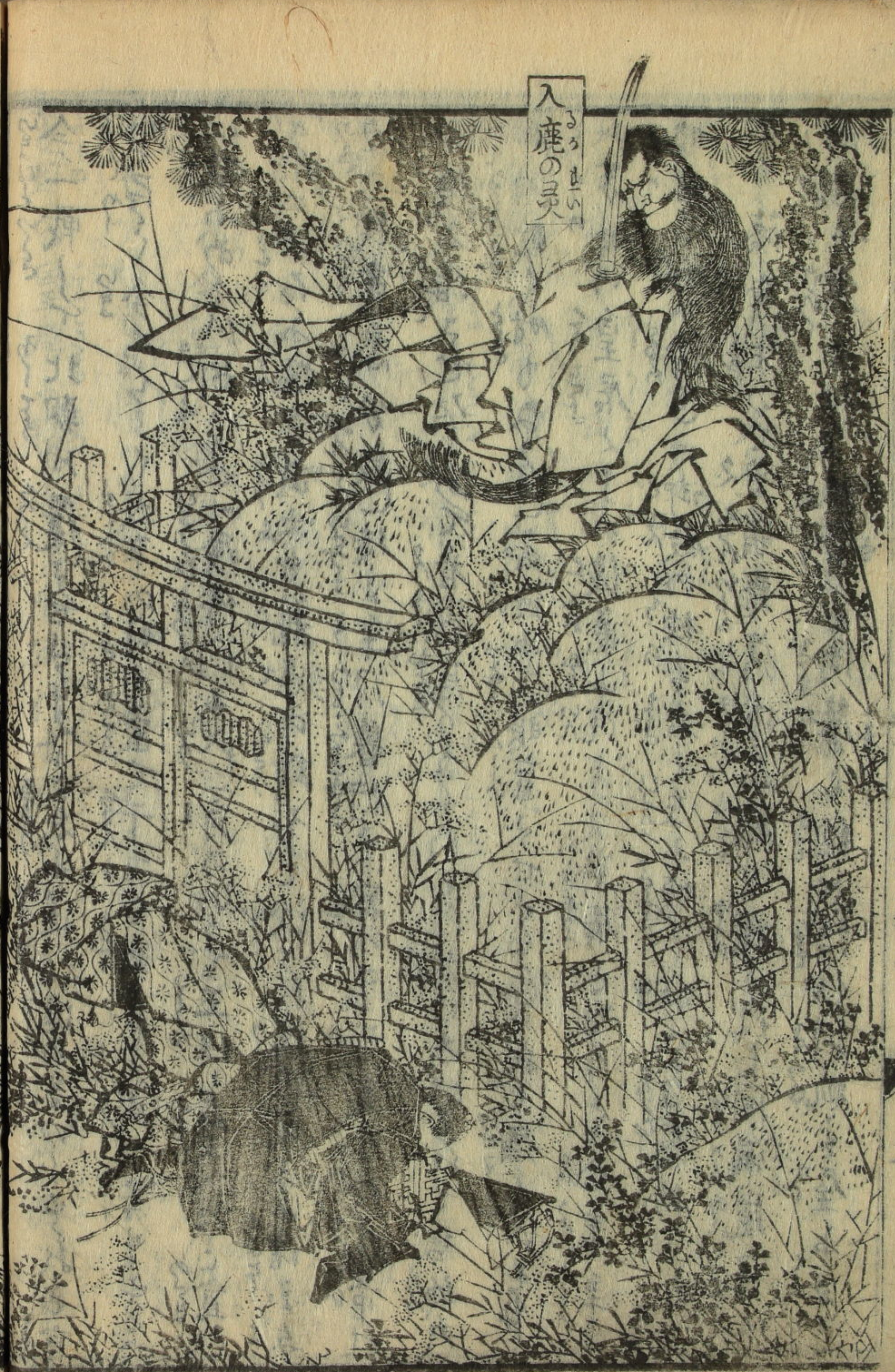
二

身を統めて二の文の日嗣は御在ハ兄家お譲らせとふべし天理や
ありん後酒百天皇とよかく聖運微ほして南山の奥に埋せし遂に
崩御し給ふとよより北朝ハ朝陽のごとく盛よなり南朝ハ残月の
ごとく衰く足利氏の武威ハ碎き有方ハ御味方悉く滅され已に
南朝四代の帝後龜山院ハ威勢つれく御降参あり候際の大覚
寺ハ入せ給ふ干時北帝ハ百一代後小松院の明德二年十月五日
三種の神器飯洛ありしに建武より四十余年ハ経る今も
北朝一統ハ飯し天下太平ハ唱けりされバ吉野殿嵯峨へ遷幸の後
も南方余竄の鬻涙痕ハ咽く今ハ忠烈誰ガ為あり勳人徳ハ
朽とつれも口惜るを」と先帝の王子圓滿院の宮を迎へ進せ
芳野の皇居ハ移しをり御位ハ即せ給ひ南朝の御旗ハ翻し

今一戦ハ北朝ハ覆せしと人々還俗進めしはこれハ言
使居る今もさうく太平の時ハ當て干戈を動して人民を苦せしハ
仁政ハあはれ刑ハと一度佛門ハ入り身ハいのを王位を望べし宣ひ
これハ流石ハ猛と武士ハ龍手の鎖をぞ淡され清りわが諸君
力の残黨悉分散徒ハ年月暮行宮ハ干寅于西先帝ハ
御陵ハ詣りて了る者勤怠のありあはれ昔の志ハこれハ悲歎ハ
新泪乾く時ハあはれしハ終ハ兩眼盲うせしハこれハ痛ハあはれ
此芳野の皇居とすハ後龜山院より皇居となりと今も
修理を加へ給ひ御殿の柱ハ右と左ハ傾く狀ハ苔蒸朽れ
あり篠薄生し壁崩落戸部も壞れと間漏嵐月と
耐雨ハ零々たり蛛蝥ハ御簾ハ細ハ結び訓狐ハ屋ハあはれ



鳥の王



入鹿の灵

怪や行ふ林ふ庭茅茨も剪がれは草葉々と茂て蓬がりのと
 夢夜半の枕ふ集つ奥山の鹿の鳴音猿の呻夢破るや梧桐の
 風乍た世景の御拙哀といわもあつうなりめとより竹花扱房公
 御殿上諸司百官の宿所も至るまで荒果ゆきの局町蒼女房
 うら殿難士上童采女女嬬下はるんどもなうてまびあつに八を藤
 葉門を因扱吹とこむ軒端の風苔り兼ぬる板間の月木乃
 るふ落らる庭の面寂寥として人跡稀なり最とこ秋はうは
 心耐いられお御傍お何候の公卿として日野従一位有光卿同右
 大弁宰相資親御のこめて松風の外の音信とのるるれば宮御
 心おそくこころせ給ふて誰うあると宣へむ有光資親これみゆと中
 も宮裏の御洞を促すと我今日睡られ夢お先帝枕上ふとせ

給ひ耐今衰運の季なればとて再身れ企およふへまにあ
 など菩提のるまとまよざれ中との詔ありなれと夢入てさるれら
 におわくろふ我素より不徳ゆしていご王位小備らんとのこなれ
 せふりら迄うて在らんよりこし永和は長慶院殿を常迅速の理
 を省悟在して王位なとて諸國修行に給ふ其例お倣むやこふ
 ころこつとくと宣へ有光は資親や泪が揮へて滅し御運開る
 まじくそらふれぬ今ハ根そ朝東の煙段果く夜の衣れ裳切破窓
 の風あふが縮夕を悔る寒を苦むが咽くらむさして日と暮さある
 おつひなれ御ありさぬなれば心ご御發心の思存まこそ然るべし我
 も御供仕らんて涙痕眼も遮る共お袖を湿らまひ多れかくて其目
 夕闇も吉野の自王居を忍やうに土を給へ御身と麻の衣に窶と

ゆせし

巻一

五

て鸞輿も今の踐行となり終ふ歩みと別とせ給ぬ草鞋は自ら結て
扱ふも隨自在と供ある有光々資親御調度懸下部二人供奉
大和路差く急せさす比の七月廿日あまうけるまれば月ハ如と路見
つと木々の梢を分るる葛の蔓を攀違の谷分下で飯後あも暗
闇路をたどり給ふりなれば袖小泪を止裳を若くは浸し給ふ哀
さよそれとも山路をたどり終小巨勢村に出給ふれがそや東の山の端月土
てゆくべしとても人へもこれ小暫労は休め給んと豆ひつ苔は延を
行敷くいりある所と見ざるに一村の荒れて鶉の床と露
滋く秋風そよぐ叢中虫の声を悲しくも昔の栄今は長長緒の旅
衣乾くまもなれ袖のしと雨いと哀れ候へ給ひ先帝御在りせぬ
かくして南朝の衰へあるまじけれも道路小編ひささか方もなれ行

未あられ夢おりのふとよと御落涙をとりなれば有光々資親も泪
流し君いづなれば西運拙くも給ふ先帝御在位の御時
かゝれ舟経小御身とけし雪趾を泥土に暗け給ん今北朝も世と狭れ
在ふうひなれ御形勢轉變無定のまといとておぼろぐのらとまれば
の成行なりやとて小舟に搭て慨らく主後泪ハ止まらざる節
あも鴨を廻りて鳥庫々此声忌に死小宮佐御耳や時とあふ
小好むま夜中も耐あふね時の時声怪哉善欽惡能と聞せと入ハ只
見秋草芒々とし生繁ありけれ中に一墓の青壙あり其上小結草啼み
ぞあり多れ此塚の何者の印ぞと聞せ給ふも有光々資親も路をた
こまへ今木の雙墓とて蘇我入鹿が古墳あての傍昔中臣鎌子
連入鹿を滅して屍を雙墓に葬埋とるりや詩とて日本紀もあ

せいのんはつりり彼入鹿と申ハ宮極天皇の御治世ハあつて蘇我蝦夷
 が子あり入鹿父が讓を受大臣ハ昇正し其喜修強大母と無道ハ誇
 王威を蔑し恣に逆威を振ひしか其積悪今母至れりて人不忠之
 けりりなし其時中臣鎌足天下社稷の傾廢歎息し舒明天皇の
 白子中の大兄小眠申せさせて密に入鹿を退治の謀を議せり又
 入鹿大臣と帝位ハ奪ん謀切はして大武備設け奢十分ハ
 極むるや死天白子の御粧ハ越えれば入鹿ハ人言ハ翻さごとりふり
 する然るハ宮極四年六月十二日天宮大極殿小土御ありて三韓の
 表狀を誦せ敵陣在る時大兄宮子密小倉山田麻呂子麻呂細田
 之祖圖ハ一はして入鹿を斫殺するハ終り父の蝦夷をも討滅
 するハ皆こと強良の忠烈がれば發陣冠を振り中臣の姓ハ改め藤原

氏ハ下され大織冠鎌足と号せ足るりかれ忠良の列臣がれい多
 武業に神と崇祭その冥驗いほしうざれど此入鹿大臣ハ朝敵あて
 逆臣の塚がれば入鹿もあつて嘆らしくゆんとならしく語りされけれ
 時ハ不測や入鹿の塚猛然として震動其鳴夥しあんどいふころあつ
 雲延と一天邊ハ搔曇り南方より雷鳴あり黒雲の中に赤旗現れて
 空ハ小遠するり亦北方より雲一ひり起り雷動ハ剪り出さごとく
 飛り雲上より思旗流となく翻り兵馬蹄ハ並甲冑の兵数万
 騎必々れ兵悉く取南北ハ峙りかくて南方の赤幡と北方乃
 旗と入乱れかたとこれハ百千の雷電天地ハ震り太山を崩かこと
 足いりある天魔の諸行をや阿修羅伽樓羅の鬼神が天堂地
 獄を一対ハ攻敗るると怪トかりられ形勢ありはしりの体相須更はし



大臺山
荒行坊
離場

王の志



南みな北きたの消き去り一いつが又また音ね々々隱ひそ火ひ燄えん々々と燃も上あり塚つち揺ゆささと心こゝろちち洞ほらと割わる
と云いふ一いつつささめ冷ひやれれ亡なつつ又また彷彿ふつと現まはは吐は咳せきとれれ声こゑを振ふりししののか
中なの臣おみのここと殺ころす入い鹿か臣おみが冥みやう魂たまなり今いまああとととしし体てい相さうと建けん武ぶより
余あま身み先まは兵へいの怨うら霊りやう南みな北きたふふママれれ修しゆ羅らの戮りやくをななせせれれなり後ご醍たい醐ご
天てん皇わう一いつ念ねんの御ご憤ふん大だい魔ま王わうととななりりせせ給たまへへと日に月げつささるるににああととひひてて今いまの
成せい佛ぶつ道だうふふ入い兜たう率すうの内うち院いんふふ移うつるるととぬぬへへかかののつつ南みな朝あさの勢せいつつれてて世よ
る北きた朝あさふふ飯いへへととやや兵へい草そう謠らうアアれれババ魔ま道だう時とき次じははにに臣おみへへとと名な
ああめめ入い鹿かの強かう勢せいの嘆なげ息いきの炎えんさされれババ修しゆ羅ら地ぢ獄じやくにに墮おちちとと多た劫けつ乃の
間ま浮うぶぶ世よささししみみはは君きみ今いま大だい義ぎととひひままととああままのの王わう法ほふ佛ぶつ法ほふとと弄ろうてて
天てん魔まの所しよ行かうををしし給たまへへ我われ惡あく冥みやう君きみのの後ご身みふふ憑ひ託たくとと魔ま鬼き行かうのの力ちから
添そ北きた朝あさふふ伏ふ次じははししてて修しゆ羅らのの鬱う憤ふんををるるけけららんん勢せい々々傳でんりりととるるふふるる

ささららふふとと多たくくへへ忽たちちち中ちゆう秋あきとと消きてて失しれれ宮みやうののでで沈しん然ぜんととしてして坐ざせせしし
調てう度ど懸けん下げ部ぶのの行かう意いもも身みをを添そぞぞおおろろくく遠とほ廻まわりり御ご衣いのの袖そでのの下したおお懸けん
一いつ次じ無むとと頸くびをを搔か爬ぱとと起たせせととああままのの首くびのの唇くちびるをを咬かむむてて左ひだり右みぎのの御ご拳こぶしをを握にぎりり
質しつハハとととと地ちににしし有ありり先ま々々資し親しん々々駭おど惶ほうととんんぢぢれれハハ柔な和やわのの顔かほ
慨がい然ぜんととしてして惡あく相さうふふ變へんじじ御ご眸めいももささししままのの割わりとと嘆なげ息いきをを眼まなこ角かくおお血ちをを
濺せんとと齒は齧かりりてて吐はののこことと息いきをを吻くちとと噴つききととううひひ今いま入い鹿か大だい臣おみがが暴あ雷らい
不ふ道だうのの勤きんををせせとと胸むねもも切きりりけてて心こゝろ地ぢはは憤ふん怒ど不ふ得とく成せい法ほふととややハハ只ただ
今いまよりより佛ぶつ法ほふ々々者しや破やぶりり魔ま鬼き方かたふふ入い大だい魔ま王わうつつつてて魔ま法ほふとと行かうひひ
天てん下げ覆ふくへへややおお北きた方かたのの奴やつ原はらいいててくく抓つかららととんんぢぢれれととれれををののこことと
とととととと虚こゝろ空くうにに眼めをを起たちちとと起たちちととああままのの冷ひやどどかりかりつつるる敵あ勢せいははりり有ありり先ま知ち
資し親しん御ごととららとと恐おそ伏ふてて君きみ苟な後ご酒しゆ酒しゆ天てん皇わうのの子こ孫そんととしてして頭あたま陀だ一いつ鉢はつ

のり

のり

の瘦法師となり給らんへ余りのあふひまうことせむるさきとさひ
つと我も草木と共に朽果んといくらかした次第なる倡々
芳野も還幸なりて魔行の謀を廻るさるべしと詞とそうてやる
嗟平いんちん事ぞやばしも賢臣の徳兼有りしゆの西郷くる邪の
道ふ染したまふかむとく小魔魅の所為ぞと知れり浩とて
小郭俄も鳴動し天狗の羽音山も山崩と海も覆るぞうの御道
て数万の火燄飛びあると又とバ金襴の袈裟掛頭巾條懸する
山伏何候し其外短の妙さりの数千羽を畜て並居る宮内卿何者
ぞやと同せし多へ我の鞍馬山の傍山坊愛宕山の太郎坊比
叡山の治郎坊嚴島の三鬼坊伯州の大仙坊彦山の豊前坊
なり其外未坐の山伏と諸國山々の木葉なり魔力も道理乃

二字みかかるるねど人心不正正法正理守らざり口達して邪法
を要とせしれと死の足則天魔の法され人同衆の諸ゆが魔鬼
より執事せり君魔法を行はんとお召主あるふより我の眷属を
随へく君も属せしとせんなめ是迄現とぬいと還幸ぞうと呼り
て法螺一通吹くとて天地冥々として夢ともねく灯もあき
瞬く間も芳野の身も居も還しせしむ異形の者ともさうせて
夜ふあのかと明とせし下思議なりさる改身なり

第二
入鹿か悪火叛逆の事
芳野王殘暴の事

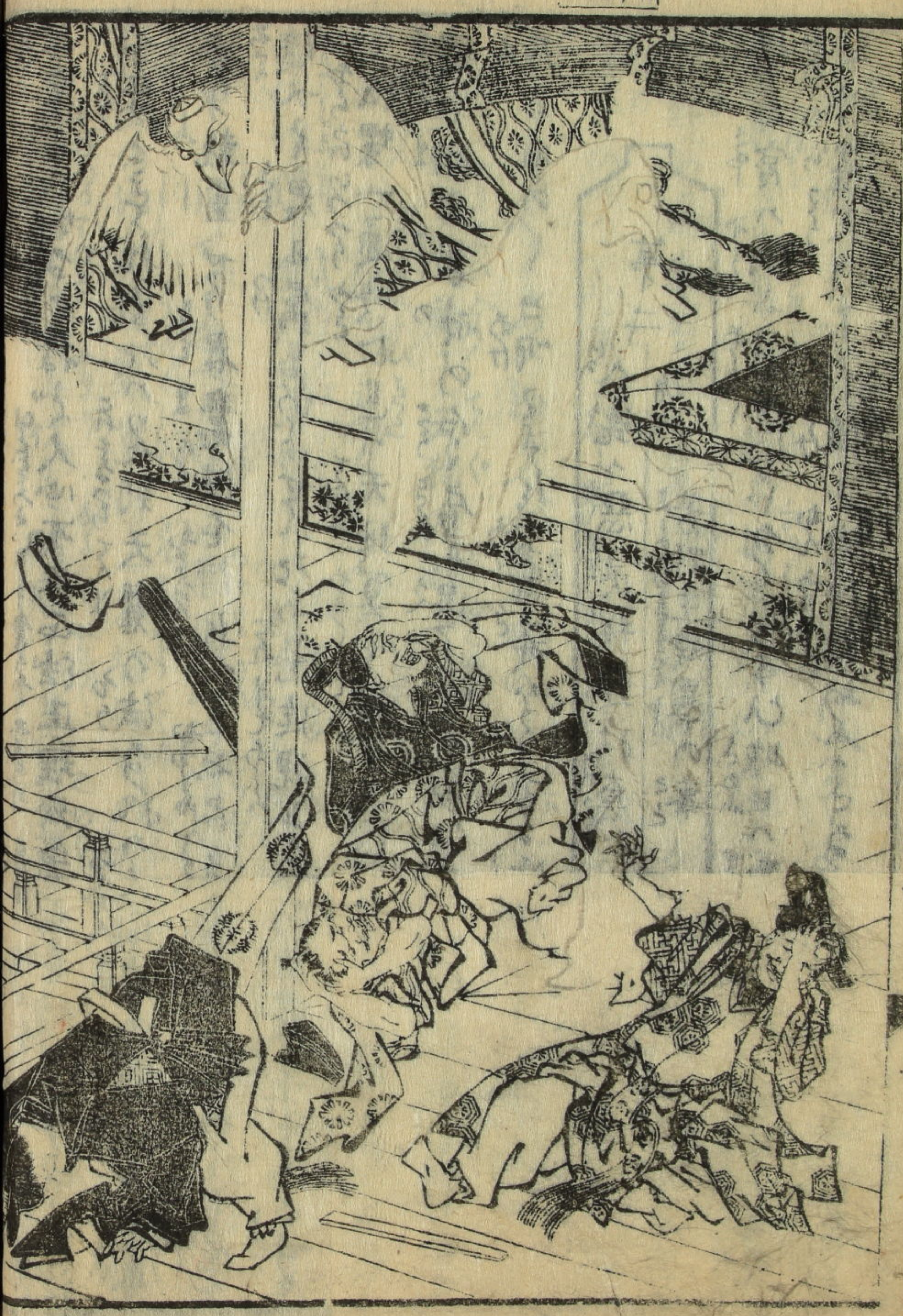
儲も宮の俄も暴々しくなりなまひ昨日の聖徳なりしを今日も
醍醐修羅王のこころ猛と御行跡あふさうさうは是ひとへ入鹿の



Vertical text on the left margin of the left page.



五ノ目



Vertical text on the right margin of the right page.

魂魄の入換了惡逆無道ヲ勸れとて人々も通のぬ大臺山
の巴が淵より分入て密に百日の荒行ヲ修し既ニ魔法成就したる
國覆の幡を翻とてしと急ニ鋒戟を求め勇士を集らんとす
させる武士もあつた吉戒十八郷の土民もあつた
野伏々民共鈍る矢の根々磨る葛の藟を弦掛て集り軍勢
不徒不日暮月移兵糧忽忽とて飢渴のぞと山中入つて
根々狼を求め或ハ猪鹿諸鳥を射て終ニ糧をへるたつ藏王
堂の丈庭に取入りて軍評定區をなす宮々天子の御位に登
せしむるにせしめて御威勢からと一國の兵々召あらしめ朝敵と
あらしむるの恐ありて集るはじとありされどもと終の神器
なるとして争り御位に即奉るべとと譯義と宮々道をすまるといふ

北朝の初光嚴院神皇よりして正慶の即位不吉の例あり鷓鴣草
昔不合するより以て未嘗有也されハ南朝ハ神皇の威徳よりして
盛んなりしに往し明德年中神器ハ北朝に與し久くとて
あれは此より我々も京都より二二二内裏に推し神義
以て奪還とてとるもなげ不宣ハ此儀尤と一儀して既に
定め宗徒の勇士二百余奇志のびく不芳也打立密に京都に
入裏中に懸かて内裏の透に現れ此対北朝の嘉吉二年九月
二十日此夜の事なりし神器飯治ありしより打つた天下を平
樂を風闕めて箏弦弄樂を自行ありされが律法定し肝銘
音樂忽意断易し伶人出く龍頭細糶利の万歳樂還城樂
そそるが夜圍らふとてひて開きとて威風をたれハ明これ秋

上
中
下



上
下



ごし此時佐々木六角判官を頼其夜待賢門の警衛を
黒田判官の美福門陽明門を堅く且つ龍駕が被廻神床
岳へ隠幸め給へし由中乃りされハ後結賢門より志の以玉を給
られかの賊徒の大王之内侍所へ御通り三種の神器を奪り
目炎の中にまよふ宮女のうら眉目よれ上臈五六人を擇執は
て安々と畑の中に引くは六角判官黒田判官追蒐矢が放り
雨が霰うとりふむと射掛て逃しかる負者救多めてあはれ
場少射殺され残黨散りに逃ゆはれはかの大王の優々桓々
て引くを六角判官多田馳寄て捕んとされ小風の吹く斬る畑乃
こくめて放箭とせしも身中らば遠小の影を足失ぬとて車
あさりて後宅剣と神壘の清水寺の門外へ捨去り納飯せし

内侍所の御鏡を奪取し其朝廷の鏡斜多しとされさるる不
内侍所の御鏡を奪ひし誰されはこは若世の宮所行なりと
魔術を以てやとと内侍所を奪し其若世の宮所還りて自負し
く多ふの太く正法を奇特し魔法をも奇特のえつれと宣ひ
是より惡逆無道いふん方も邪く三種そあらぬども内侍所在
かゝる即位あるべしとてやがて位を登り給ふされとも是の天子
さるる時人々若世の王とのと称奉る王なりか御給ひ朕
一天万衆の天子なる上は何をう憚ん速に大内裏に造りし宮
殿樓閣の美を尽し結構天下の目々驚し威勢に海を越さ
諸國の武士士のつら服して北朝を平吞せん奉り中よめれ
その今賤用とせられしと宣へ階下に伺し宮城玄蕃荒卷

と滅亡せし太宰少貳喜頼が妾狭高風ふこれやとも
實量公の鑑ふ参りて密にお中や我々身命と抛て内付所を取
震襟を休ちもどんたあふ下下の御為懸命れ忠節をばし
と赤松太宰の族が罪科御免の勅許下下るべ由歎き訟られ
右府公同召神器取奉て天忠を盡し上罪科赦免のふり何
糸好細おしとりおぐる取得る奉輒おのふいありと准し繪
ハ難助狭高されはゆとしてひしく庭前おありしも嘆の橋の一枝づ
折と銘々公お捧けし右府公志をく沈吟したるひて花のい
縁と判らなりさて吾子各一子あり共一子切ても素懐と遂へ
盟なるりとおすれはごといひて我々金鐵の赤心賢恵のこく一子
切と苦計をそし内付所を取奉らんるの後おぞ知食えしとすけ
實量公感賞斜らして各々こもあふ議する恩の為大忠

はなりとくく討まわらせよとありられん天小喜地お拜して直馬苦世
ふ赴つ竟お内付所を取還せし全く雅助狭高が勲績おふれ其
忠烈末お至りて芳しく実亮の御吉野武士の人の鑑とありりる

貸小石川水道町
本一巻地文雅
所要宗

